

桜貝 永遠に 幼き 桜色

~~緋袴の巫女も老いたり神の留守~~

△花びらとなつて仕舞ひし桜かな

枯草が枯草の上に横たはる

太陽の彼方なりけり雲の峰

番号や団地の壁に夕焼けて

草や木の灰の功德や豆を蒔く

手花火の棒が残りぬ先が焦げ

~~△今どきの若い奴らのサングラス~~

地球儀が二つプールに浮いてをる

誘蛾灯虫篝とも言ひ伝へ

~~△本降りそのままに暮れゆく枇杷の種~~

~~△いわし雲よりも大きなきのこ雲~~

~~△万歳の小さき両手や鴟の贅~~

朝顔や曙色に暁色に~~花明る色に花の色に~~

△南瓜とは大きな野菜重たくて~~化~~南瓜馬車の飾りの

海のもの陸に売らるる寒さかな

大寒や割りて鋭きチョコレート

~~△~~今日もまた氷柱を折つて出勤す

如く咲く

年終り

②

桜貝 永遠に 幼き 桜色

花びらとなつて仕舞ひし桜かな

太陽の彼方なりけり雲の峰

炎天や炎の如く埃立つ

番号や団地の壁に夕焼けて

宿浴衣きのふは緋けふは縞

草や木の灰の功德や豆を蒔く

手花火の棒が残りぬ先が焦げ

地球儀が二つプールに浮いてをる

誘蛾灯虫篝とも言ひ伝へ

遠く来て燕の幸や子沢山

花南瓜馬車の飾りの如く咲く

朝顔や夜明の色に夜の色に

海のもの陸に売らるる寒さかな

大寒や割りて鋭きチヨコレート

枯草が枯草の上に横たはる

葱買うてフランスパンのやうに持ち

地球儀が二つプールに浮いてをる
誘蛾灯虫篝とも言ひ伝へ
23
水音とたつて
5.11
ぬるりけり

3

雛壇に転がつてゐる砂時計

味見 桜貝 永遠に 幼き 桜色

猫の子に舐められてゐる主かな

猫の子に舐められてゐる掌

猫の子に舐められてゐるこの世かな

花びらとなつて仕舞ひし桜かな

太陽の彼方なりけり雲の峰

炎天や炎の如く埃立つ

番号や団地の壁に夕焼けて

宿浴衣きのふは緋けふは縞

草や木の灰の功德や豆を蒔く

△手花火の棒が残りぬ先が焦げ

地球儀が二つプールに浮いてをる

誘蛾灯虫篝とも言ひ伝へ

遠く来て燕の幸や子沢山

花南瓜馬車の飾りの如く咲く

△片隅に自転車倒れ秋の雨

朝顔や夜明の色に夜の色に

大寒や割りて鋭きチヨコレート

大いなる猫の肛門寒夕焼

幻のねこの眠れるねんねこや

葱買うてフランスパンも忘れずに

ゆく年や厨に鍋の新しき

もう一度

(4)

寒明や割りて鋭きチヨコレート

行く春のしんがり白きスーザフォン

残雪や熊も食ふなる苦きもの

雛壇に転がつてゐる砂時計

一生を棒の如くに虚子忌かな

桜貝 永遠に幼き桜色

花びらとなつて仕舞ひし桜かな

太陽の彼方なりけり雲の峰

金閣の金の瓦の炎天下

番号や団地の壁に夕焼けて

夕焼の逆光に立つ金閣寺

宿浴衣きのふは緋けふは縞

草や木の灰の功德や豆を蒔く

地球儀が二つプールに浮いてをる

誘蛾灯虫篝とも言ひ伝へ

遠く来て燕の幸や子沢山

花南瓜馬車の飾りの如く咲く

澄む水を暖かにして尻洗ふ

朝顔や夜明の色に夜の色に

葱買うてフランスパンも忘れずに

ゆく年や厨に鍋の新しき

せし又は遠き年の音

二瓶平十茶 芳村んとす

バニラの音を聞けり

金閣寺 5.13

炎天下

のぬるま湯に尻洗ひをす 5.13

原洗子 洗ふお茶

心機よし

の活か飯

年甲壳

あまゆび

ふじとろ

草の功徳を蒔く 5.13

地球儀が二つプールに浮いてをる 5.13

誘蛾灯虫篝 5.13

遠く来て燕の幸や子沢山 5.13

花南瓜馬車の飾りの如く咲く 5.13

新しき鍋の活躍年用意

~~寒明~~や割りて鋭きチヨコレート
行く春のしんがりの白スーザフォン
残雪や熊も食ふなる苦きもの
雛壇に時を操る砂時計
一生を棒の如くに虚子忌かな
桜貝永遠に幼き桜色
~~花~~びらとなつて飛び立つ桜かな
太陽の彼方なりけり雲の峰
~~金~~閣の金の瓦の炎暑かな
番号や団地の壁に夕焼けて
宿浴衣きのふは緋けふは縞
地球儀が二つプールに浮いてをる
誘蛾灯虫篝とも言ひ伝へ
遠く来て燕の幸や子沢山
馬車飾る鈴になるべし花南瓜
朝顔や夜明の色に夜の色に
葱買うてパン屋の前を通りけり

行く春のしんがりの白スーザフォン
残雪や熊も食ふなる苦きもの
雛壇に時を操る砂時計
一生を棒の如くに虚子忌かな
桜貝永遠に幼き桜色
猫の子の頭に神の見えざる手
太陽の彼方なりけり雲の峰
番号や団地の壁に夕焼けて
宿浴衣きのふは緋けふは縞
地球儀が二つプールに浮いてをる
誘蛾灯虫篝とも言ひ伝へ
遠く来て燕の幸や子沢山
馬車飾る鈴になるべし花南瓜
曲りつつ色を変へ行く稲穂かな
朝顔や夜明の色に夜の色に
葱買うてパン屋の前を通りけり
新しき鍋の活躍年用意

歳時記の始めは春や暖かし

宿浴衣きのふは緋けふは縞

行く春のしんがりの白スーザフォン

誘蛾灯虫篝とも言ひ伝へ

バックネット裏のあんパン春の雲

遠く来て燕の幸や子沢山

淡雪をあは雪と書く哀れかな

あらはれて雨のあやめとなりけり

残雪や熊も食ふなる苦きもの

馬車飾る鈴になるべし花南瓜

ふらここに風船ガムをふくらます

ひまはり雪の深さを知らざりき

雛壇に時を操る砂時計

曲りつつ色を変へゆく稲穂かな

背は伸びて手足細しや雛祭

朝顔や夜明の色に夜の色に

画用紙の如く干されて蒸躰

スケートの先へ先へと憎らしき

青豆のごとレガッタに詰め込まれ

葱買うてパン屋の前を通りけり

一生を棒の如くに虚子忌かな

新しき鍋の活躍年用意

桜貝永遠に幼き桜色

新しき鍋の活躍年用意

猫の子の頭に神の見えざる手

誤字ひとつ見つけ涼しき机かな

太陽の彼方なりけり雲の峰

番号や団地の壁に夕焼けて

沈々と薄き光の心太

もつれろ 5.16

若の風

またとひろきとてたまつ日

春をれお 5.16 の上に

双葉をけり

招老に

かきおに

招え

はらその花の

新しき鍋の活躍年用意

残雪や熊も食ふなる苦きもの

遠く来て子に恵まれし燕かな

淡雪をあはゆきと書く哀れかな

あらはれて雨のあやめとなりけり

歳時記の春を開けば春の風

馬車飾る鈴になるべし花南瓜

春なれや富士の麓の桜海老

ひまはりは雪の深さを知らざりき

桜貝永遠に幼き桜色

番号や団地の壁に夕焼けて

背が伸びて細き手足や雛祭

誘蛾灯虫篝とも言ひ伝へ

ふらここに風船ガムをふくらます

朝顔や夜明の色に夜の色に

バックネット裏のあんパン春の雲

曲りつつ色を変へゆく稲穂かな

青豆のごとレガッタに詰め込まれ

スケートの先へ先へと憎らしき

一生を棒の如くに虚子忌かな

葱買うてパン屋の前を通りけり

猫の子の頭に神の見えざる手

鍋釜の鍋新しき年用意

画用紙の干さるる如く蒸鱧

行く春のしんがりの白スーザフォン

誤字ひとつあつて涼しき机かな

太陽の彼方なりけり雲の峰

沈々と薄き光の心太

宿浴衣きのふは緋けふは縞

9

16
1
3/12
2
2
1

歳時記の春を開けば春の風

誤字ひとつあつて涼しき机かな

残雪や熊も食ふなる苦きもの

太陽の彼方なりけり雲の峰

淡雪をあはゆきと書く哀れかな

宿浴衣きのふは緋けふは縞

雪解けの富士の麓の桜海老

遠く来て子宝を得し燕かな

桜貝永遠に幼き桜色

花びらの先の白濁白牡丹

背が伸びて細き手足や雛祭

あらはれて雨のあやめとなりけり

ふらここに風船ガムをふくらます

馬車飾る鈴になるべし花南瓜

バックネット裏のあんパン春の雲

ひまはりは雪の深さを知らざりき

青豆のごとレガッタに詰め込まれ

番号や団地の壁に夕焼けて

壺焼の壺を貰つて帰りけり

誘蛾灯虫篝とも言ひ伝へ

一生を棒の如くに虚子忌かな

朝顔や夜明の色に夜の色に

猫の子の頭に神の見えざる手

曲りつつ色を変へゆく稲穂かな

画用紙の干さるる如く蒸鱧

スケートの先へ先へと憎らしき

山葵田の水全幅で奏でをる

葱買うてパン屋の前を通りけり

行く春のしんがりの白スーザフォン

鍋釜の鍋新しき年用意

遠山の雷を聞く豊かな

もう一度子猫となつて会ひに来よ

玉葱をバットで打つてみたきかな

歳時記の春を開けば春の風

残雪や熊も食ふなる苦きもの

淡雪をあはゆきと書く哀れかな

雪解の富士の麓の桜海老

桜貝永遠に幼き桜色

背が伸びて細き手足や雛祭

ふらここに風船ガムをふくらます

バックネット裏のあんパン春の雲

青豆のごとレガッタに詰め込まれ

壺焼の壺を貰つて帰りけり

一生を棒の如くに虚子忌かな

味見するやうに子猫を舐めてをる

猫の子の頭に神の見えざる手

画用紙の干さるる如く蒸鱧

山葵田の水全幅で奏でをる

行く春のしんがりの白スーザフォン

遠山の雷を聞く畳かな

炊きやれば子に褒められし豆の飯

玉葱をバットで打つてみたきかな

誤字ひとつあつて涼しき机かな

太陽の彼方なりけり雲の峰

宿浴衣きのふは緋けふは縞

遠く来て子宝を得し燕かな

花びらの先の白濁白牡丹

あらはれて雨のあやめとなりけり

馬車飾る鈴になるべし花南瓜

ひまわりは雪の深さを知らざりき

番号や団地の壁に夕焼けて

夕立にささくれてゐる地べたかな

誘蛾灯虫篝とも言ひ伝へ

八月の赤字九月の黒字かな

朝顔や夜明の色に夜の色に

秋風や招待券の長四角

曲りつつ色を変へゆく稲穂かな

毛糸玉子猫のために買ふことも
スケートの先へ先へと憎らしき
葱買うてパン屋の前を通りけり
鍋釜の鍋新しき年用意
もう一度子猫になつて会ひに来よ

西日まけいって? 5.16

歳時記の春を開けば春の風

誤字ひとつありて涼しき机かな

葱買うてパン屋の前を通りけり

残雪や熊も食ふなる苦きもの

太陽の彼方なりけり雲の峰

鍋釜の鍋新しき年用意

淡雪をあはゆきと書く哀れかな

宿浴衣きのふは緋けふは縞

もう一度子猫になつて会ひに来よ

雪解の富士のつめたき桜えび

遠く来て子宝を得し燕かな

桜貝 永遠に幼き桜色

花びらの端の白濁白牡丹

背が伸びて細き手足や雛祭

あらはれて雨のあやめとなりけり

味見するやうに子猫を舐めてをる

馬車飾る鈴になるべし花南瓜

ふらここに風船ガムをふくらます

ひまはりは雪の深さを知らざりき

バックネット裏のあんパン春の雲

番号や団地の壁に夕焼けて

~~青豆のごとレガッタに詰め込まれ~~

夕立にささくれ立ちし地べたかな

壺焼の壺を貰つて帰りけり

誘蛾灯虫篝とも言ひ伝へ

~~画用紙の干さるる如く蒸鱈~~

八月の赤字九月の黒字かな

山葵田の水全幅で奏でをる

朝顔や夜明の色に夜の色に

行く春のしんがりの白スーザフォン

秋風や招待券の長四角

遠山の雷を聞く畳かな

曲りつつ色を変へゆく稲穂かな

玉葱をバットで打つてみたきかな

毛糸玉子猫のために買ふことも

炊きやれば子に褒められし豆の飯

スケート先の先へ先へと憎らしき

三塩、文字、社令天の心、涼れ巻 5.17

社令作句

2019.5.17 角2019 全40句

(12) 233

13-13-8
-4-1

歳時記の春を開けば春の風

残雪や熊も食ふなる苦きもの

淡雪をあはゆきと書く哀れかな

雪解の富士のつめたき桜えび

桜貝 永遠に 幼き 桜色

背が伸びて細き手足や雛祭

味見するやうに子猫を舐めてをる

ふらここに風船ガムをふくらます

バックネット裏のあんパン春の雲

壺焼の壺を貰つて帰りけり

山葵田の水全幅で奏でをる

行く春のしんがりの白スーザフォン

遠山の雷を聞く豊かな

炊きやれば子に褒められし豆の飯

誤字ひとつありて涼しき机かな

太陽の彼方なりけり雲の峰

宿浴衣きのふは緋けふは縞

遠く来て子宝を得し燕かな

花びらの端の白濁白牡丹

あらはれて雨のあやめとなりけり

馬車飾る鈴になるべし花南瓜

ひまはりは雪の深さを知らざりき

番号や団地の壁に夕焼けて

夕立にささくれ立ちし地べたかな

誘蛾灯虫篝とも言ひ伝へ

八月の赤字九月の黒字かな

朝顔や夜明の色に夜の色に

秋風や招待券の長四角

火がついて秋刀魚まつりのにぎはひに

曲りつつ色を変へゆく稲穂かな

風船の五つに裂けし桔梗かな

黒板の文字の短命天の川

△秋深し朱色格子にものを書く

毛糸玉子猫のために買ふことも

17行3段組14ボ 2019年5月17日 21:17 桐9

スケートの先へ先へと憎らしき

葱買うてパン屋の前を通りけり

湯ざめするまでは湯ざめでなかりけり

鍋釜の鍋新しき年用意

もう一度子猫になつて会ひに来よ

夕立の雨粒のほびさるる

社休岸老って不足のをマ考し

とりまへず 苗人形に化けてみる

下午なりに

5.18

5.18

5.18

5.18

5.18

5.18

5.18

5.18

5.18

5.18

今カヤウ

花稲穂? 曲りつつ稲穂かな
色も変りぬやと

この妻きん糸色坊子ヤ

秋の夜の色格子に

長き花 ものを書く

13

45/281

15・14・10・5・1

歳時記の春を開けば春の風

太陽の彼方なりけり雲の峰

縦書は塔婆に良けれ曼珠沙華

残雪や熊も食ふなる苦きもの

宿浴衣きのふは緋けふは縞

屋上に駐車場あり今日の月

淡雪をあはゆきと書く哀れかな

はるばると来て乙鳥の子沢山

△秋の夜の格子模様や卓の上

雪解の富士のつめたき桜えび

ありありと傷ついてゐる揚羽蝶

黑板の文字の短命天の川

桜貝永遠に幼き桜色

花びらの端の白濁白牡丹

毛糸玉子猫のために買ふことも

背が伸びて細き手足や雛祭

馬車飾る鈴になるべし花南瓜

スケートの先へ先へと憎らしや

花びらを蝶の如くに壁に刺す

ひまはりは雪の深さを知らざりき

葱買うてパン屋の前を通りけり

味見するやうに子猫を舐めてをる

番号や団地の壁に夕焼けて

剥くと云ふこと林檎にも蜜柑にも

ふらここに風船ガムをふくらます

夕立にささくれ立ちし地べたかな

湯ざめするまでは湯ざめでなかりけり

試みの雲雀餅とや買うてやろ

みづからも骸となりぬ蚊遣香

新しき鍋に始まる年用意

バックネット裏のあんパン春の雲

誘蛾灯虫篝とも言ひ伝へ

もう一度子猫になつて会ひに来よ

壺焼の壺を貰つて帰りけり

八月の赤字九月の黒字かな

✓ありありと破れ目のある黒揚羽

山葵田の水全幅で奏でをる

朝顔や夜明の色に夜の色に

✓破れ目のそろい破るる

行く春のしんがりの白スーザフォン

秋風や招待券の長四角

✓破れ目のそろい破るる

遠山の雷を聞く畳かな

火がついて秋刀魚祭の佳境なり

✓ひんがし深き破れの

炊きやれば子に褒められし豆の飯

曲りつつ青き稲穂の色変り

✓に深手とをりぬ

誤字ひとつありて涼しき机かな

風船の五つに裂けし桔梗かな

✓揚羽蝶

R. 小次?

△秋の夜の格子模様や卓の上

ありありと傷ついてゐる揚羽蝶

花びらの端の白濁白牡丹

馬車飾る鈴になるべし花南瓜

ひまはりは雪の深さを知らざりき

番号や団地の壁に夕焼けて

夕立にささくれ立ちし地べたかな

みづからも骸となりぬ蚊遣香

誘蛾灯虫篝とも言ひ伝へ

八月の赤字九月の黒字かな

朝顔や夜明の色に夜の色に

秋風や招待券の長四角

火がついて秋刀魚祭の佳境なり

曲りつつ青き稲穂の色変り

揚羽蝶

14

歳時記の春を開けば春の風

残雪や熊も食ふなる苦きもの

淡雪をあはゆきと書く哀れかな

桜貝 永遠に 幼き 桜色

背が伸びて細き手足や雛祭

花びらを蝶の如くに壁に刺す

味見するやうに子猫を舐めてをる

~~ふら~~ここに風船ガムをふくらます

試みの雲雀餅とや買うてやろ

バックネット裏のあんパン春の雲

壺焼の壺を貰つて帰りけり

山葵田の水全幅で奏でをる

行く春のしんがりの白スーザフォン

遠山の雷を聞く畳かな

炊きやれば子に褒められし豆の飯

誤字ひとつありて涼しき机かな

~~太陽~~の彼方なりけり雲の峰

宿浴衣きのふは緋けふは縞

子宝のこぼれむばかり燕の巢

~~動~~くたびに深手となりぬ揚羽蝶

花びらの端の白濁白牡丹

馬車飾る鈴になるべし花南瓜

ひまわりは雪の深さを知らざりき

番号や団地の壁に夕焼けて

夕立にささくれ立ちし地べたかな

みづからも骸となりし蚊遣香

誘蛾灯虫篝とも言ひ伝へ

八月の赤字九月の黒字かな

朝顔~~は~~夜明の色に夜の色に

秋風や招待券の長四角

火がついて秋刀魚祭の佳境なり

曲りつつ青き稲穂の色変り

風船の五つに裂けし桔梗かな

縦書は塔婆に良けれ曼珠沙華

屋上に駐車場あり今日の月

黒板の文字の短命天の川

毛糸玉子猫のために買ふことも

スケートの先へ先へと憎らしや

葱買うてパン屋の前を通りけり

剥くと云ふこと林檎にも蜜柑にも

湯ざめするまでは湯ざめでなかりけり

新しき鍋に始まる年用意

もう一度子猫になつて会ひに来よ

白雲の端に白雲の端

雲の端

タウトル

歳時記の春を開けば春の風 ひまはりは雪の深さを知らざりき 遠山の雷を聞く豊かな 宿浴衣きのふは緋けふは縞 誤字ひとつありて涼しき机かな 番号や団地の壁に夕焼けて 夕立にささくれ立ちし地べたかな みづからも骸となりし蚊遣香 誘蛾灯虫篝とも言ひ伝へ 八月の赤字九月の黒字かな 朝顔は夜明の色に夜の色に 秋風や招待券の長四角 火がついて秋刀魚祭の佳境なり 曲りつつ青き稲穂の色変り 風船の五つに裂けし桔梗かな 縦書は塔婆に良けれ曼珠沙華 屋上に駐車場あり今日の月 黒板の文字の短命天の川

残雪や熊も食ふなる苦きもの 淡雪をあはゆきと書く哀れかな 桜貝永遠に幼き桜色 背が伸びて細き手足や雛祭 花びらを蝶の如くに壁に刺す 味見するやうに子猫を舐めてをる 試みの雲雀餅とや買うてやろ バックネット裏のあんパン春の雲 壺焼の壺を貰つて帰りけり 山葵田の水全幅で奏でをる 行く春のしんがりの白スーザフォン

炊きやれば子に褒められし豆の飯 子宝のこぼれむばかり燕の巢 馬車飾る鈴になるべし花南瓜 夏は白雲丈の高きも誇らしき

湯ざめするまでは湯ざめでなかりけり 新しき鍋に始まる年用意 もう一度子猫になつて会ひに来よ

毛糸玉子猫のために買ふことも スケートの先へ先へと憎らしや 葱買うてパン屋の前を通りけり 剥くと云ふこと林檎にも蜜柑にも

夏は雨は白雲指の丈 5.21 midn 5.20

あまきこ

毎年のすが

coop 172 4:30 pm

5.20

5.20

5.20

5.20

5.20

5.20

5.20

5.20

5.20

歳時記の春を開けば春の風

馬車飾る鈴になるべし花南瓜

淡雪をあはゆきと書く哀れかな

輪廻する液体気体部屋冷やす

桜貝 永遠に幼き桜色

ひまはりは雪の深さを知らざりき

背が伸びて細き手足や雛祭

番号や団地の壁に夕焼けて

花びらを蝶の如くに壁に刺す

夕立にささくれ立ちし地べたかな

味見するやうに子猫を舐めてをる

みづからも骸となりし蚊遣香

試みの雲雀餅とや買うてやろ

誘蛾灯虫篝とも言ひ伝へ

バックネット裏のあんパン春の雲

八月の赤字九月の黒字かな

壺焼の壺を貰つて帰りけり

朝顔は夜明の色に夜の色に

山葵田の水全幅で奏でをる

秋風や招待券の長四角

行く春のしんがりの白スーザフォン

火がついて秋刀魚祭は佳境へと

誤用また楽しからずや五月晴

曲りつつ青き稲穂の色変り

炊きやれば子に褒められし豆の飯

風船の五つに裂けし桔梗かな

子宝のこぼれむばかり燕の巢

縦書は塔婆に良けれ曼珠沙華

空の色空色ならず梅雨入前

屋上に駐車場あり今日の月

遠山の雷を聞く畳かな

黒板の文字の短命天の川

宿浴衣きのふは緋けふは縞

毛糸玉子猫のために買ふことも

スケートの先へ先へと憎らしや

葱買うてパン屋の前を通りけり

剥くと云ふこと林檎にも蜜柑にも

湯ざめするまでは湯ざめでなかりけり

新しき鍋に始まる年用意

もう一度子猫になつて会ひに来よ

湯ざめのなかりけり

新しき鍋のなかりけり

もう一度子猫になつて会ひに来よ

湯ざめのなかりけり

新しき鍋のなかりけり

もう一度子猫になつて会ひに来よ

湯ざめのなかりけり

新しき鍋のなかりけり

もう一度子猫になつて会ひに来よ

湯ざめのなかりけり

新しき鍋のなかりけり

みかふかの水に濡れれば冷い

また読めれ名札を付けて入園

言をまて能いんははるフキリトウ

2019.5.21 角川俳句賞2019「会ひに来よ」#17 ハードエッジ全43句 348

17行3段組14ポ 2019年5月21日 20:37へ1桐9

桜

歳時記の春を開けば春の風
背が伸びて細き手足や雛祭
桜貝永遠に幼き桜色
花びらを蝶の如くに壁に刺す
味見するやうに子猫を舐めてをる
試みの雲雀餅とや買うてやろ
バックネット裏のあんパン春の雲
壺焼の壺を貰つて帰りけり
山葵田の水全幅で奏でをる
誤用また楽しからずや五月晴
炊きやれば子に褒められし豆の飯
子宝のこぼれむばかり燕の巢
空の色空色ならず梅雨入前
馬車飾る鈴になるべし花南瓜
遠山の雷を聞く畳かな
宿浴衣きのふは緋けふは縞
炎天の線路時々電車来る

行く春

冷房の体育館にサーブ打つ
水泳の下手な体操部員なり
△水泳の下手な体操部員なり
△水泳の下手な体操部員なり
胡瓜揉み作りたる手の塩辛き
ひまわりは雪の深さを知らざりき
番号や団地の壁に夕焼けて
夕立にささくれ立ちし地べたかな
みづからも骸となりし蚊遣香
誘蛾灯虫篝とも言ひ伝へ
冷蔵庫ボタンと閉めてまた明日
八月の赤字九月の黒字かな
朝顔は夜明の色に夜の色に
秋風や招待券の長四角
火がついて秋刀魚祭は佳境へと
曲りつつ青き稲穂は色を変へ
風船の五つに裂けし桔梗かな
縦書は塔婆に良けれ曼珠沙華
屋上に駐車場あり今日の月

梅雨

黒板の文字の短命天の川
Rぶらんこの中へ数多の流れ星
毛糸玉子猫のために買ふことも
スケートの先へ先へと憎らしや
葱買うてパン屋の前を通りけり
剥くと云ふこと林檎にも蜜柑にも
湯ざめするまでは湯ざめでなかりけり
新しき鍋に始まる年用意
もう一度子猫になつて会ひに来よ

詩句 R 波

雪を出て熊に食はるる露の臺 遠山の雷を聞く豊かな 風船の五つに裂けし桔梗かな

歳時記の春の中より春の風 宿浴衣きのふは緋けふは縞 縦書は塔婆に良けれ曼珠沙華

背が伸びて細き手足や雛祭 炎天の線路時々電車来る 屋上に駐車場あり今日の月

桜貝永遠に幼き桜色 冷房の体育館にサーブ打つ 黒板の文字の短命天の川

花びらを蝶の如くに壁に刺す 泳ぐこと下手な体操部なりけり ぶらんこが好きで数多の流れ星

味見するやうに子猫を舐めてをる 胡瓜揉み作りたる手の塩辛き 毛糸玉子猫のために買ふことも

試みの雲雀餅とや買うてやろ ひまはりは雪の深さを知らざりき スケートの先へ先へと憎らしや

バックネット裏のあんパン春の雲 番号や団地の壁に夕焼けて 葱買うてパン屋の前を通りけり

壺焼の壺を貰つて帰りけり 夕立にささくれ立ちし地べたかな 剥くと云ふこと林檎にも蜜柑にも

山葵田の水全幅で奏でをる みづからも骸となりし蚊遣香 湯ざめするまでは湯ざめでなかりけり

電柱は刺さるレガッタは進む 誘蛾灯虫篝とも言ひ伝へ 新しき鍋に始まる年用意

誤用また楽しからずや五月晴 冷蔵庫ボタンと閉めてまた明日 もう一度子猫になつて会ひに来よ

炊きやれば子に褒められし豆の飯 八月の赤字九月の黒字かな 赤字の因り給や良の秋

子宝のこぼれむばかり燕の巢 朝顔は夜明の色に夜の色に 赤字の因り給や良の秋

空の色空色ならず梅雨入前 秋風の招待券の長四角 赤字の因り給や良の秋

毒だみや夜遊びに行く五六人 火がついて秋刀魚祭は佳境 赤字の因り給や良の秋

馬車飾る鈴になるべし花南瓜 曲りつつ青き稲穂は金色に 赤字の因り給や良の秋

ふとんこいふる流れ星 5.23

2019.5.22

362
12+18
+10+5
+1

17行3段組14ボ

桐9

赤字の因り給や良の秋

2019.5.23 角川俳句賞2019 「会ひに来よ」 #19 ハードエッジ 全46句

383
14+12
+9+5
+

17行3段組14ポ 2019年5月23日 12:43 へ1 桐9

雪を出て熊を叱咤の蕨の臺

毒だみや夜遊びに行く五六人

風船の五つに裂けし桔梗かな

歳時記の春の巻より春の風

馬車飾る鈴になるべし花南瓜

縦書は塔婆に良けれ曼珠沙華

背が伸びて細き手足や雛祭

遠山の雷を聞く豊かな

屋上に駐車場あり今日の月

桜貝永遠に幼き桜色

宿浴衣きのふは緋けふは縞

黒板の文字の短命天の川

永かれと小便かける桜かな

炎天の線路時々電車来る

ぶらんこが好きな流星遊びに来

花びらを蝶の如くに壁に刺す

冷房の体育館にサーブ打つ

毛糸玉子猫のために買ふことも

味見するやうに子猫を舐めてをる

胡瓜揉み作りたる手の塩辛き

スケートの先へ先へと憎らしや

試みの雲雀餅とや買うてやろ

ひまはりは雪の深さを知らざりき

葱買うてパン屋の前を通りけり

バックネット裏のあんパン春の雲

番号や団地の壁に夕焼けて

剥くと云ふこと林檎にも蜜柑にも

壺焼の壺を貰つて帰りけり

夕立にささくれ立ちし地べたかな

湯ざめするまでは湯ざめでなかりけり

山葵田の水全幅で奏でをる

みづからも骸となりし蚊遣香

新しき鍋に始まる年用意

虚子の忌の棒を継ぎ足し継ぎ足して

誘蛾灯虫篝とも言ひ伝へ

もう一度子猫になつて会ひに来よ

電柱は刺さりレガッタは進む

冷蔵庫ボタンと閉めてまた明日

火事またないバロキ鳥渡

誤用また楽しからずや五月晴

八月の赤字九月の黒字かな

たはむれに白ひ合せのセンブリー

炊きやれば子に褒められし豆の飯

秋風の招待券の長四角

火がついて秋刀魚祭の佳境かな

子宝のこぼれむばかり燕の巢

火がついて秋刀魚祭の佳境かな

曲りつつ青き稲穂は金色に

322の曲

433
6
4
4

残雪の寝ぼけの熊に露の臺 毒だみや夜遊びに行く五六人

火がついて秋刀魚祭の佳境なり

歳時記の春の巻より春の風 馬車飾る鈴になるべし花南瓜

曲りつつ青き稲穂は金色に

背が伸びて細き手足や雛祭 遠山の雷を聞く豊かな

神の手に切られ五弁の花桔梗

桜貝永遠に幼き桜色 宿浴衣きのふは緋けふは縞

縦書は塔婆に良けれ曼珠沙華

花びらを蝶の如くに壁に刺す 炎天の線路時時電車来る

屋上に駐車場あり今日の月

畑中に小便もらふ桜かな 冷房の体育館にサーブ打つ

黒板の文字の短命天の川

味見するやうに子猫を舐めてをる 胡瓜揉み塩辛き手となりけり

おらんこが好きな流星遊びに来

試みの雲雀餅とや買うてやろ ひまはりは雪の深さを知らざりき

毛糸玉子猫のために買ふことも

バックネット裏のあんパン春の雲 番号や団地の壁に夕焼けて

スケートの先へ先へと憎らしや

壺焼の壺を貰つて帰りけり 西日へと一直線に路地燃ゆる

葱買うてパン屋の前を通りけり

山葵田の水全幅で奏でをる 夕立にささくれ立ちし地べたかな

剥くと云ふこと林檎にも蜜柑にも

虚子の忌の棒を継ぎ足し継ぎ足して みづからも骸となりし蚊遣香

湯ざめするまでは湯ざめでなかりけり

電柱は刺さるレガッタは進む 誘蛾灯虫篝とも言ひ伝へ

新しき鍋に始まる年用意

誤用また楽しからずや五月晴 やり過ぎす今日の暑さよ涼しさよ

もう一度子猫になつて会ひに来よ

炊きやれば子に褒められし豆の飯 冷蔵庫ボタンと閉めてまた明日

八月の赤字九月の黒字かな

子宝のこぼれむばかり燕の巢 秋風の招待券の長四角

空の色空色ならず梅雨入前

会ひに来よ
5.23

2019.5.24 角川俳句賞2019 「会ひに来よ」 #21 ハードエッジ 全45句

17行3段組14ポ 2019年5月24日 07:27 <1> 桐9

~~残雪の寝ぼけの熊に露の臺~~

毒だみや夜遊びに行く五六人

縦書は塔婆に良けれ曼珠沙華

歳時記の春の巻より春の風

馬車飾る鈴になるべし花南瓜

屋上に駐車場あり今日の月

背が伸びて細き手足や雛祭

遠山の雷を聞く豊かな

黒板の文字の短命天の川

桜貝永遠に幼き桜色

宿浴衣きのふは緋けふは縞

毛糸玉子猫のために買ふことも

花びらを蝶の如くに壁に刺す

炎天の線路時時電車来る

スケートの先へ先へと憎らしや

畑中に小便もらふ桜かな

冷房の体育館にサーブ打つ

葱買うてパン屋の前を通りけり

味見するやうに子猫を舐めてをる

胡瓜揉み塩辛き手となりけり

剥くと云ふこと林檎にも蜜柑にも

試みの雲雀餅とや買うてやろ

ひまはりは雪の深さを知らざりき

湯ざめするまでは湯ざめでなかりけり

バックネット裏のあんパン春の雲

番号や団地の壁に夕焼けて

新しき鍋に始まる年用意

壺焼の壺を貰つて帰りけり

夕立にささくれ立ちし地べたかな

初写真カメラは既に一部品

山葵田の水全幅で奏でをる

みづからも骸となりし蚊遣香

もう一度子猫になつて会ひに来よ

虚子の忌の棒を継ぎ足し継ぎ足して

誘蛾灯虫篝とも言ひ伝へ

山子の山草花に控く除夜の鐘

電柱は刺さるレガッタは進む

冷蔵庫ボタンと閉めてまた明日

去年今年どんなんらんとこへても

誤用また楽しからずや五月晴

八月の赤字九月の黒字かな

夜へ回やちづと紋りよす如く

炊きやれば子に褒められし豆の飯

秋風の招待券の長四角

カクテルより光線

子宝のこぼれむばかり燕の巢

火がついて秋刀魚祭の佳境なり

カクテルより光線

空の色空色ならず梅雨入前

曲りつつ青き稲穂は金色に

カクテルより光線

新や

秋葉のなまともこそ今年ある

カクテルより光線

足踏用紙 (マフ)

✓ 女路のとうり白きと熊に丸はれけり

✓ 心ん心ん 伊ん? 土氣に ちんちん
✓ 行く年 歩 歩 歩 歩 歩 歩 歩 歩 歩 歩

cf 7/22 ス

✓ 新や
大古の如く
2019年

✓ 秋葉のなまともこそ今年ある
秋葉のなまともこそ今年ある

✓ カクテルより光線
カクテルより光線

にんじ

2019・5・25 角川俳句賞2019「会ひに来よ」#22 ハードエッジ 全50句

469
15+13
+7+5
+10

17行3段組14ポ 2019年5月25日 09:17 へ1 桐9

落の薑目覚めし熊に食はれけり

馬車飾る鈴になるべし花南瓜

毛糸玉子猫のために買ふことも

歳時記の春の巻より春の風

遠山の雷を聞く曇かな

スケートの先へ先へと憎らしや

背が伸びて細き手足や雛祭

宿浴衣きのふは緋けふは縞

葱買うてパン屋の前を通りけり

桜貝永遠に幼き桜色

炎天の線路時時電車来る

剥く時は林檎包丁指蜜柑

花びらを蝶の如くに壁に刺す

冷房の体育館にサーブ打つ

湯ざめするまでは湯ざめでなかりけり

畑中に小便もらふ桜かな

胡瓜揉み塩辛き手となりけり

新しき鍋に始まる年用意

味見するやうに子猫を舐めてをる

ひまはりは雪の深さを知らざりき

数へ日やチューブを絞り出すやうに

試みの雲雀餅とや買うてやろ

番号や団地の壁に夕焼けて

行く年に歩調を合はすつもりなり

バックネット裏のあんパン春の雲

みづからも骸となりし蚊遣香

山寺の篝火に撞く除夜の鐘

壺焼の壺を貰つて帰りけり

冷蔵庫ボタンと閉めてまた明日

去年今年どんなに息をこらへても

山葵田の水全幅で奏でをる

八月の赤字九月の黒字かな

暗闇の中の波音年新た

すくすくと伸びる土筆に音もなし

秋風の招待券の長四角

太箸の太きをもつて今年かな

虚子の忌の棒を継ぎ足し継ぎ足して

火がついて秋刀魚祭の佳境なり

初夢の雪は桜に変わりけり

電柱は刺さるレガッタは進む

曲りつつ青き稲穂は金色に

初写真カメラと云ふも一部品

誤用また楽しからずや五月晴

縦書は塔婆に良けれ曼珠沙華

歌留多の夜すなはち歌留多の世のありき

空の色空色ならず梅雨入前

屋上に駐車場あり今日の月

もう一度子猫になつて会ひに来よ

毒だみや夜遊びに行く五六人

黒板の文字の短命天の川

楡一字とすのきと洗む泳一まよふ

4著の宿

夏は終極ははへくれ

守神とて夏は

469

17行3段組14ポ

CINO made in milano

33起

欠伸して熊の貪る露の臺

馬車飾る鈴になるべし花南瓜

黒板の文字の短命天の川

歳時記の春の巻より春の風

避暑の宿雷様に迎へられ

毛糸玉子猫のために買ふことも

背が伸びて細き手足や雛祭

宿浴衣きのふは緋けふは縞

スケートの先へ先へと憎らしや

桜貝永遠に幼き桜色

炎天の線路時時電車来る

葱買うてパン屋の前を通りけり

花びらを蝶の如くに壁に刺す

冷房の体育館にサーブ打つ

剥く時の林檎包丁蜜柑指

畑中に小便もらふ桜かな

胡瓜揉み塩辛き手となりけり

湯ざめするまでは湯ざめでなかりけり

味見するやうに子猫を舐めてをる

ひまはりは雪の深さを知らざりき

新しき鍋に始まる年用意

△試みの雲雀餅とや買うてやろ

番号や団地の壁に夕焼けて

数へ日やチューブを絞り出すやうに

バックネット裏のあんパン春の雲

みづからも骸となりし蚊遣香

行く年に歩調を合はすつもりなり

壺焼の壺を貰つて帰りけり

冷蔵庫ボタンと閉めてまた明日

山寺の篝火に撞く除夜の鐘

山葵田の水全幅で奏でをる

八月の赤字九月の黒字かな

去年今年どんなに息をこらへても

△すすくくと伸びる土筆に音もなし

秋風の招待券の細長き

暗闇の中の波音年新た

虚子の忌の棒を継ぎ足し継ぎ足して

これよりぞ秋刀魚祭に火がついて

△太箸の太きをもつて今年かな

電柱は刺さるレガッタは進む

稲は日に芋は土中に太りをる

初夢の雪は桜に変わりけり

誤用また楽しからずや五月晴

曲りつつ青き稲穂は金色に

初写真カメラと云ふも一部品

△空の色空色ならず梅雨入前

縦書は塔婆に良けれ曼珠沙華

もう一度子猫になつて会ひに来よ

毒だみや夜遊びに行く五六人

屋上に駐車場あり今日の月

右とホと鉄の巻そのし
右の巻と鉄の巻そのし
やヒラのの宿
ういぶ

お目覚めの熊に食はるる露の薑 冷房のなき本堂の太柱 剥く時の林檎包丁蜜柑指

歳時記の春の巻より春の風 胡瓜揉み塩辛き手となりにけり 湯ざめするまでは湯ざめでなかりけり

背が伸びて細き手足や雛祭 ひまはりは雪の深さを知らざりき 新しき鍋に始まる年用意

桜貝永遠に幼き桜色 番号や団地の壁に夕焼けて 数へ日やチューブを絞り出すやうに

花びらを蝶の如くに壁に刺す みづからも骸となりし蚊遣香 行く年に歩調を合はすつもりなり

畑中に小便もらふ桜かな 冷蔵庫ボタンと閉めてまた明日 山寺に篝火ふたつ除夜の鐘

味見するやうに子猫を舐めてをる 八月の赤字九月の黒字かな 去年今年どんなに息を殺しても

バックネット裏のあんパン春の雲 秋風の招待券の細長き 暗闇の中の波音年新た

壺焼の壺を貰つて帰りけり これよりぞ秋刀魚祭が火を噴いて 初夢の雪は桜に変わりけり

山葵田の水全幅で奏でをる 稲は日に芋は土中に太りをる 初写真カメラと云ふも一部品

虚子の忌の棒を継ぎ足し継ぎ足して 曲りつつ青き稲穂は金色に もう一度子猫になつて会ひに来よ

電柱は刺さるレガッタは進む 縦書は塔婆に良けれ曼珠沙華 対人恐怖症の子猫嫌い 家籠

誤用また楽しからずや五月晴 屋上に駐車場あり今日の月 教も来て仲良しこよし 年忘れ

毒だみや夜遊びに行く五六人 黒板の文字の短命天の川 行く年に隠れて白んを殺した子

馬車飾る鈴になるべし花南瓜 毛糸玉子猫のために買ふことも エンゲに

宿浴衣きのふは緋けふは縞 スケートの先へ先へと憎らしや どのく

石と木と鉄の暑さの線路かな 葱買うてパン屋の前を通りけり 直んをひるめたる

✓ 鯉と木と石と 5.25 5.25
✓ 山葵田の水全幅で奏でをる
✓ 対人恐怖症の子猫嫌い 家籠

PC伊那の交カ甲

2019・5・26 角川俳句賞2019 「会ひに来よ」 #25 ハードエッジ 全41句

17行3段組14ポ 2019年5月26日 10:59へ1〜桐9

529
13+12
+7+5
+4

お目覚めの熊に食はるる露の薑

冷房のなき本堂の太柱

剥く時の林檎包丁蜜柑指

歳時記の春の巻より春の風

井は涼しと猫の子が眠る

湯ざめするまでは湯ざめでなかりけり

背が伸びて細き手足や雛祭

胡瓜揉み塩辛き手となりにけり

新しき鍋に始まる年用意

桜貝永遠に幼き桜色

ひまはりは雪の深さを知らざりき

歌も出て仲良きは美し年忘

花びらを蝶の如くに壁に刺す

番号や団地の壁に夕焼けて

行く年の近くに息をひそめたる

畑中に小便もらふ桜かな

みづからも骸となりし蚊遣香

山寺のあたりが赤し除夜の鐘

味見するやうに子猫を舐めてをる

冷蔵庫ボタンと閉めてまた明日

もう一度子猫になつて会ひに来よ

バックネット裏のあんパン春の雲

八月の赤字九月の黒字かな

壺焼の壺を貰つて帰りけり

これよりぞ秋刀魚祭が火を噴いて

山葵田の水全幅で奏でをる

稲は日に芋は土中に太りをる

虚子の忌の棒を継ぎ足し継ぎ足して

曲りつつ青き稲穂は金色に

電柱は刺さるレガッタは進む

縦書は塔婆に良けれ曼珠沙華

誤用また楽しからずや五月晴

屋上に駐車場あり今日の月

毒だみや夜遊びに行く五六人

黒板の文字の短命天の川

馬車飾る鈴になるべし花南瓜

毛糸玉子猫のために買ふことも

宿浴衣きのふは緋けふは縞

スケートの先へ先へと憎らしや

石と木と鉄の炎昼電車行く

葱買うてパン屋の前を通りけり

道ありまた天下
取れん
電車均け

略歴フリント

トキリ感!

44
551
13+12
+7+5
+7

お目覚めの熊に食はるる露の薑
歳時記の春の巻より春の風
背が伸びて細き手足や雛祭
桜貝 永遠に 幼き桜色
花びらを蝶の如くに壁に刺す
畑中に小便もらふ桜かな
味見するやうに子猫を舐めてをる
バックネット裏のあんパン春の雲
壺焼の壺を貰つて帰りけり
山葵田の水全幅で奏でをる
虚子の忌の棒を継ぎ足し継ぎ足して
電柱は刺さるレガッタは進む
誤用また楽しからずや五月晴
毒だみや夜遊びに行く五六人
馬車飾る鈴になるべし花南瓜
宿浴衣きのふは緋けふは縞
石と木と鉄の道あり炎天下

冷房のなき本堂の太柱
井は涼しと猫の子が眠る
胡瓜揉み塩辛き手となりけり
ひまはりは雪の深さを知らざりき
番号や団地の壁に夕焼けて
みづからも骸となりし蚊遣香
冷蔵庫ボタンと閉めてまた明日
八月の赤字九月の黒字かな
これよりぞ秋刀魚祭が火を噴いて
稲は日に芋は土中に太りをる
曲りつつ青き稲穂は金色に
縦書は塔婆に良けれ曼珠沙華
屋上に駐車場あり今日の月
黒板の文字の短命天の川
毛糸玉子猫のために買ふことも
スケートの先へ先へと憎らしや
葱買うてパン屋の前を通りけり

剥く時の林檎包丁蜜柑指
湯ざめするまでは湯ざめでなかりけり
新しき鍋に始まる年用意

△歌も出て仲良きは美し年忘
行く年の近くに息をひそめたる

山寺のあたりが赤し除夜の鐘
赤々と見えぬて遠き初日かな

初夢に見知らぬ人がにこにこと
瓶に入れ流してみたし宝船

もう一度子猫になつて会ひに来よ

あめ丸のしづしづ上り初日が夏

5.27

2019・5・27 角川俳句賞2019 「会ひに来よ」 #27 ハードエッジ全43句

589
13+12
+7+5
+6

17行3段組14ボ 2019年5月27日 18:10 へ1 桐9

お目覚めの熊に食はるる露の薑

冷房のなき本堂の太柱

剥く時の林檎包丁蜜柑指

歳時記の春の巻より春の風

井は涼しと猫の子が眠る

湯ざめするまでは湯ざめでなかりけり

背が伸びて細き手足や雛祭

胡瓜揉み塩辛き手となりけり

新しき鍋に始まる年用意

桜貝 永遠に 幼き 桜色

ひまはりは雪の深さを知らざりき

行く年の近くに息をひそめたる

花びらを蝶の如くに壁に刺す

番号や団地の壁に夕焼けて

山寺のあたりが赤し除夜の鐘

畑中に小便もらふ桜かな

みづからも骸となりし蚊遣香

ぽつかりと初日を生めり海の上

味見するやうに子猫を舐めてをる

冷蔵庫ボタンと閉めてまた明日

初夢に見知らぬ人がにこにこ

バックネット裏のあんパン春の雲

八月の赤字九月の黒字かな

瓶に入れ海へ流さむ宝船

壺焼の壺を貰つて帰りけり

これよりぞ秋刀魚祭が火を噴いて

もう一度子猫になつて会ひに来よ

山葵田の水全幅で奏でをる

稲は日に芋は土中に太りをる

着飾りて河津の遊子歌かるて

虚子の忌の棒を継ぎ足し継ぎ足して

曲りつつ青き稲穂は金色に

二日二日や二三日

電柱は刺さるレガッタは進む

縦書は塔婆に良けれ曼珠沙華

黑板の文字の短命天の川

誤用また楽しからずや五月晴

屋上に駐車場あり今日の月

毛糸玉子猫のために買ふことも

毒だみや夜遊びに行く五六人

毛糸玉子猫のために買ふことも

スケートの先へ先へと憎らしや

馬車飾る鈴になるべし花南瓜

毛糸玉子猫のために買ふことも

葱買うてパン屋の前を通りけり

宿浴衣きのふは緋けふは縞

スケートの先へ先へと憎らしや

葱買うてパン屋の前を通りけり

石と木と鉄の道あり炎天下

葱買うてパン屋の前を通りけり

葱買うてパン屋の前を通りけり

45
601
13+12
+8+5
T7

お目覚めの熊に食はるる露の薑

冷房のなき本堂の太柱

葱買うてパン屋の前を通りけり

歳時記の春の巻より春の風

井は涼しと猫の子が眠る

剥く時の林檎包丁蜜柑指

背が伸びて細き手足や雛祭

胡瓜揉み塩辛き手となりけり

湯ざめするまでは湯ざめでなかりけり

桜貝永遠に幼き桜色

ひまはりは雪の深さを知らざりき

新しき鍋に始まる年用意

花びらを蝶の如くに壁に刺す

番号や団地の壁に夕焼けて

行く年に息を殺してゐたりけり

畑中に小便もらふ桜かな

みづからも骸となりし蚊遣香

山寺のあたりが赤し除夜の鐘

味見するやうに子猫を舐めてをる

冷蔵庫ボタンと閉めてまた明日

ぼつかりと初日を生めり海の上

バックネット裏のあんパン春の雲

八月の赤字九月の黒字かな

初夢に見知らぬ人がにこにこと

壺焼の壺を貰つて帰りけり

これよりぞ秋刀魚祭が火を噴いて

瓶に入れ流してみたき宝船

山葵田の水全幅で奏でをる

稲は日に芋は土中に太りをる

着飾りて詩歌の国の歌留多会

虚子の忌の棒を継ぎ足し継ぎ足して

曲りつつ青き稲穂は金色に

もう一度子猫になつて会ひに来よ

電柱は刺さるレガッタは進む

縦書は塔婆に良けれ曼珠沙華

もう一度子猫になつて会ひに来よ

誤用また楽しからずや五月晴

下駄箱の中の長靴秋の暮

は山をせうけり

毒だみや夜遊びに行く五六人

屋上に駐車場あり今日の月

は山をせうけり

馬車飾る鈴になるべし花南瓜

黒板の文字の短命天の川

は山をせうけり

宿浴衣きのふは緋けふは縞

毛糸玉子猫のために買ふことも

は山をせうけり

石と木と鉄の道あり炎天下

スケートの先へ先へと憎らしや

は山をせうけり

格両句

2019・5・29 角川俳句賞2019 「会ひに来よ」 #29 ハードエッジ 全48句

622
13+12
+10+5
+8

17行3段組14ボ 2019年5月29日 14:14 へ1 桐9

お目覚めの熊に食はるる露の薑 冷房のなき本堂の太柱

毛糸玉子猫のために買ふことも

歳時記の春の巻より春の風 井は涼しと猫の子が眠る

△スケートの先へ先へと憎らしや

背が伸びて細き手足や雛祭 胡瓜揉み塩辛き手となりけり

葱買うてパン屋の前を通りけり

桜貝永遠に幼き桜色 ひまはりは雪の深さを知らざりき

剥く時の林檎包丁蜜柑指

花びらを蝶の如くに壁に刺す 番号や団地の壁に夕焼けて

湯ざめするまでは湯ざめでなかりけり

畑中に小便もらふ桜かな みづからも骸となりし蚊遣香

新しき鍋に始まる年用意

味見するやうに子猫を舐めてをる 冷蔵庫ボタンと閉めてまた明日

行く年に息を殺してゐたりけり

バックネット裏のあんパン春の雲 八月の赤字九月の黒字かな

山寺のあたりが赤し除夜の鐘

壺焼の壺を貰つて帰りけり 積み上げて夢の高さの桃の山

ぼつかりと初日を生めり海の上

山葵田の水全幅で奏でをる 曲りつつ青き稲穂は金色に

泣初の赤子の舌の短さよ

虚子の忌の棒を継ぎ足し継ぎ足して 稲は日に芋は土中に太りをる

初夢に見知らぬ人がにこにこと

電柱は刺さるレガッタは進む 縦書は塔婆に良けれ曼珠沙華

瓶に入れ流してみたき宝船

誤用また楽しからずや五月晴 これよりぞ秋刀魚祭が火を噴いて

着飾りて詩歌の国の歌留多会

毒だみや夜遊びに行く五六人 下駄箱の中の長靴秋の暮

もう一度子猫になつて会ひに来よ

馬車飾る鈴になるべし花南瓜 蜂蜜のとろりと夜学果つるかな

55 DB 部屋の暖衣物の冷冬籠

宿浴衣きのふは緋けふは縞 黒板の文字の短命天の川

✓ 暖衣物の冷冬籠

石と木と鉄の道あり炎天下 屋上に駐車場あり今日の月

✓ 暖衣物の冷冬籠

毒と初日を生めり海の上

2019・5・30 角川俳句賞2019 「会ひに来よ」 #30 ハードエッジ全49句

季語数 148
34+49
+27
+19
+18
676
13+13+10
+5+8

17行3段組14ポ 2019年5月30日 18:21へ1桐9

お目覚めの熊に食はるる露の薑 石と木と鉄の道あり炎天下

黒板の文字の短命天の川

歳時記の春の巻より春の風 冷房のなき本堂の太柱

毛糸玉子猫のために買ふことも

背が伸びて細き手足や雛祭 井は涼しと猫の子が眠る

健気なりコンクリートも大根も

桜貝永遠に幼き桜色 胡瓜揉み塩辛き手となりにけり

葱買うてパン屋の前を通りけり

花びらを蝶の如くに壁に刺す ひまはりは雪の深さを知らざりき

剥く時の林檎包丁蜜柑指

畑中に小便もらふ桜かな 番号や団地の壁に夕焼けて

湯ざめするまでは湯ざめでなかりけり

味見するやうに子猫を舐めてをる みづからも骸となりし蚊遣香

新しき鍋に始まる年用意

バックネット裏のあんパン春の雲 冷蔵庫ボタンと閉めてまた明日

行く年に息を凝らしてゐたりけり

壺焼の壺を貰つて帰りけり 八月の赤字九月の黒字かな

山寺のあたりが赤し除夜の鐘

山葵田の水全幅で奏でをる 白桃を夢の高さに積み上げて

ぼつかりと初日を生めり海の上

虚子の忌の棒を継ぎ足し継ぎ足して 曲りつつ青き稲穂は金色に

泣初の赤子の舌の短さよ

電柱は刺さるレガッタは進む 稲は日に芋は土中に太りをる

初夢に見知らぬ人がにこにこと

誤用また楽しからずや五月晴 縦書は塔婆に良けれ曼珠沙華

瓶に入れ流してみたき宝船

梅雨の月花より濡れてゐたりけり これよりぞ秋刀魚祭が火を噴いて

着飾りて詩歌の国の歌留多会

毒だみや夜遊びに行く五六人 下駄箱の中の長靴秋の暮

もう一度子猫になつて会ひに来よ

馬車飾る鈴になるべし花南瓜 屋上に駐車場あり今日の月

蜂蜜のとろりと夜学果つるかな

昔印老坊紅智の坊

680
13+13
+10+6
+8

お目覚めの熊に食はるる露の薑

石と木と鉄の道あり炎天下

黒板の文字の短命天の川

歳時記の春の巻より春の風

冷房のなき本堂の太柱

毛糸玉子猫のために買ふことも

背が伸びて細き手足や雛祭

井は涼しと猫の子が眠る

健気なりコンクリートも大根も

桜貝 永遠に 幼き 桜色

胡瓜揉み塩辛き手となりにけり

葱買うてパン屋の前を通りけり

花びらを蝶の如くに壁に刺す

ひまはりは雪の深さを知らざりき

剥く時の林檎包丁蜜柑指

畑中に小便もらふ桜の木

番号や団地の壁の夕焼けて

湯ざめするまでは湯ざめでなかりけり

味見するやうに子猫を舐めてをる

みづからも骸となりし蚊遣香

新しき鍋に始まる年用意

バックネット裏のあんパン春の雲

冷蔵庫ボタンと閉めてまた明日

行く年に息を凝らしてゐたりけり

壺焼の壺を貰つて帰りけり

八月の赤字九月の黒字かな

山寺のあたりが赤し除夜の鐘

山葵田の水全幅で奏でをる

白桃を夢の高さに積み上げて

ぼつかりと初日を生めり海の上

虚子の忌の棒を継ぎ足し継ぎ足して

曲りつつ青き稲穂は金色に

泣初の赤子の舌の短さよ

電柱は刺さるレガッタは進む

稲は日に芋は土中に太りをる

初夢に見知らぬ人がにこにこと

誤用また楽しからずや五月晴

縦書は塔婆に良けれ曼珠沙華

瓶に入れ流してみたき宝船

梅雨の月花より濡れてゐたりけり

これよりぞ秋刀魚祭が火を噴いて

着飾りて詩歌の国の歌留多会

毒だみや夜遊びに行く五六人

下駄箱の中の長靴秋の暮

寒卵売場 乳製品売場

馬車飾る鈴になるべし花南瓜

屋上に駐車場あり今日の月

もう一度子猫になつて会ひに来よ

宿浴衣きのふは緋けふは縞

蜂蜜のとろりと夜学果つる頃